
輝く星

聖成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く星

【Nコード】

N2436Y

【作者名】

聖成

【あらすじ】

人気者の彼と地味な私。

クラスに友達が居ない暦6年。

大体、親しい友達はほかのクラスになってしまふ。

誰とも話すことなく私はただ本を読み続けていた。

今月は本を五冊読み終えることを目標に毎日、休み時間は本を読んでいる。

クラスでのあだ名は本さん。

本好きの本さん、その本なーに？

本好きの本さん、その本は面白いの？

本好きの本さん、あなたにはお友達はいないの？

そうやっていわれ続け早十一ヶ月。

「ねえ、君・・・あーいや、えつとー岸本さんだよね？」

彼は平野 聖也。

女子からの人気は圧倒的で学年一、いや、校内一モテる男として名が知られている。

もちろん、男子からも人気は高く、友達が多い。

私とは大違いだ。

「俺、平野 聖也！岸本……」

「岸本 あかり……です。」

私は眼鏡の位置を整える。

彼は私の眼鏡に興味を持ったらしい。

「ねねっ、その眼鏡、貸して！」

私からパツと眼鏡を取り上げ、自分に装着させてみる。

何をしてても可愛く、かつこよく見える彼は私の眼鏡ひとつで皆の注目を集めた。

「何、聖也眼鏡かけてんのー？」

「モテる男がさらにモテたいっていうのかよ！」

軽く男子が椅子の上に立っている平野くんの背中をたたく。

平野くんはバランスを崩し、平野くんの背中が私の方へ迫ってくる。

眼鏡をかけていない私は前髪が被さり、よく前が見えなかった。

私のおでこと平野くんの背中がぶつかる瞬間。

やっと、平野くんが倒れてきたことに気がついた。

思いつきり、私は床に仰向けに倒れる。

少しずれて、平野くんも倒れる。

私が最後に見たのは、平野くんの時計に絡まってどこかへ飛んでいく髪ゴムだった。

「……もと……岸本!!」

私は急いで飛び起きる。

見ると、そこは保健室。

白いシーツの上に寝かされていたようだ。

「ごめん、岸本。」

平野くんは手を合わせて誤る。

私は大丈夫だといったものの、かすかに頭が痛かった。

頭を強打したのかもしれない。

眼鏡がないため、平野くんさえ、手を合わせて何度も誤っている、ということしか見えない。

私は急いで眼鏡を探す。

平野くんが優しく、私に眼鏡を返してくれた。

「ねえ、岸本さん。岸本さん、今度から、絶対に眼鏡はずさないでね。」

平野くんは照れくさそうにそういつて出て行った。

すると、後ろの開いている窓から声がした。

「岸本さん。あいつ、岸本さんのこと、好きだから。」

「多分、眼鏡はずした姿、誰にも見られたくないんじゃないの。」

「悪く思わないであげてね。」

そういつていつも平野ちゃんと仲良くしている同級生の男子は走ってどこかへいつてしまった。

私は頭上に？マークを浮かばせながら帰る。

いつもとは少し違った帰り道だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2436y/>

輝く星

2011年11月5日14時07分発行